



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『大和物語』在中将章段及び周辺章段を読み直す
Author(s)	小野, 芳子
Citation	国語国文研究, 131, 15-31
Issue Date	2007-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93487
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_131-15-31.pdf



『大和物語』 在中將章段及び周辺章段を読み直す

小 野 芳 子

はじめに

『大和物語』第一六〇段から一六六段は、「在中將」なる人物を核とし、その作とされる歌によって構成された章段群である。『大和物語』は、いわゆる「歌語り」の集成であるという定説がある。在中將章段も、『古今集』や『伊勢物語』に載る歌話の口承的に語り伝えられた別伝らしきものが、『大和物語』を集成した時点で書きとめられたとされてきた。一方で、これらの一連の物語が、『古今集』や『伊勢物語』に取材して作られた、書承関係にあるものと考えられることは、近年しばしば主張されており、それを疑う余地は狭められている。ただ、口承、書承のいずれの立場を取るにせよ、『伊勢物語』よりも情趣が劣る、完成度が低い、という評価が与えられてきた。しかし、『伊勢物語』を踏まえて物語を作っていることが認められてきた以上は、後発的であるにも拘わらずわざわざ劣る別伝の歌話を

書き記したもののなかとうかがう点を再考するべきである。

さらに、従来は、『大和物語』の章段の連続性には、人物の連続、和歌の主題の類似、あるいは「並び」という副次的章段の付随という法則性が認められてきた。この点についても、最近では、それらにとどまるものではなく、物語の主要な事物を表すのでないように見えることがばらばらに連関していたり、数章段を隔ててキーワードが連関するような事象がみえていることが報告されている。そのうえ、歌話の主題が悲哀感の方向に貫かれて全体が緩やかに統一性を持っているとされてきたが、歌話の精細な読み取りにより、実は「笑い」の要素が横溢していることも指摘されてきている。^(注3)

今後、『大和物語』独自の物語構成の方法を読み解くためには、収載された一首一首、あるいは一話一話が『古今集』や『伊勢物語』と同じ歌や話であるという先入観を排し、どのように違ふものかという視点から読み取りをし、さらにこれまでいわれている人物の連続や主題の大づかみな共通性に限らない別の章段連続の方法を探る

ことが必要である。この立場から、在中将章段、ならびに問題を共有すると考えられるその周辺の章段、第五百五十四段から第六百七十七段までを読み直してみたい。

なお、『大和物語』は本来「章段」という断絶はなく、一連の歌と地の文とが綿々と連続した形式の作品であるが、従来の章段の単位ごとに考えるのが簡便であるので、章段の別を論証の手段として使うものとする。

一、在中将与二条后章段群の解釈

第一六一段から第一六三段までの、和歌四首で構成されている三章段は、在中将与二条后との応酬の物語と考えられている。^(注4)その指摘の通り、二条后関連に四首の和歌が採られ、「ただ人」「春宮女御」「御息所」「后」という呼称や、それに表されている位の推移が時間の継起を表すように配置されたものである。

第一六一段については、別稿にて詳述した。この章段は『伊勢物語』第三段、第七十六段をつなぎ合わせたとみられているが、『伊勢物語』とは状況設定や人物造型の意図が違っているものである。そして、『伊勢物語』とは歌本文に違いがなくとも、地の文の創作・改変により異なる意味が与えられており、『伊勢物語』では別章段で直接関連のない二首が『大和物語』では語や技巧を踏まえている。第二首目の歌は『古今集』雑部に入集しているが、雑部でも賀の内容を持つ一連の歌群に配されているこの歌が、『大和物語』中ではまったく私的な交情の歌として位置づけられている。特に在中将与二条

後の関係が親密であるように造型されていることを明らかにした。^(注5)

第一六二段は、『伊勢物語』第百段とほぼおなじ歌で構成されている。以下、本文を、他の作品と比較して挙げていく(本文は、『大和物語』は、為家本の本文を適宜仮名遣いを改め、漢字仮名交じりにし、句読点を施した。校異について必要なものはその都度示した。『古今集』は『新編国歌大観』第一巻、『伊勢物語』は『新日本古典文学大系 竹取物語 伊勢物語』に拠った。なおルビ、仮名遣いの注記は省略した)。

『伊勢物語』第百段

むかし、おとこ、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむことなき人の御局より、忘れ草を「忍ぶ草とやいふ」とて、出ださせたまへりければ、給はりて

忘草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまん

『大和物語』第一六二段

又、在中将、内にさぶらふに、御息所の御かたより、忘れ草をなむ、「これはなにとかいふ」とてたまへりければ、中将

忘草生ふる野べとは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ

となむありける。おなじ草を、忍ぶ草、忘れ草と言へば、それよりなむよみたりける

このふたつの物語の大きな違いは、登場人物、傍線部の女からの問いかけのことば、二種の植物のとらえ方である。登場人物は、『伊

『勢物語』が、後涼殿に上御局を持つある后妃であるのに対し、『大和物語』では、ここだけを見れば「御息所」であるが、これが二条后であろうということは前述の通りすでに認められたことで、その方向で読みたい。『大和物語』の「これはなにとかいふ」という問いかけについて、柿本獎氏『大和物語の注釈と研究』は「虚静抄」の、「中将の、中絶て参らぬを、忘れやしつと、かこちてとひかけたる心なるべし」という注を引いている。現在の『大和物語』諸注でも、明確に解釈を特定していないものが多いのだが、ほぼこの、「あなたが私を忘れている」とあてこすった意、という方向で解釈しているようである。しかし、この解釈は、あくまでも『伊勢物語』第百段の、「忘れ草を」「忍ぶ草とやいふ」という難詰を敷衍したものである。

これに基づくのではなく、虚心坦懷に『大和物語』当該章段を読めば、この問いかけは、「これは何というのか（私は忘れたが）」という疑問のことばである。差し出されているものが「忘れ草（忘れる種）」であるだけに、問いかけが草の名称に即応している点が、物語展開のおもしろさであるに他ならない。地の文の「忘れ草をなむ」の係助詞の使い方も効果的である。御息所が、その実は「忘れ草」という草の名を忘れたりするはずはないのだが、おぼめかして、相手である中将がどのような反応をするか、なにか色よい返事でもあるかと試みるための科白である。

そもそも、現在諸注釈で言われているように、忘れ草と忍ぶ草がまったく別の植物だということが事実だとするならば、『伊勢物語』の（忘れ草を）「忍ぶ草とやいふ」（あるいは、注釈者によつては「忘

れ草を忍ぶ草とやいふ」という全体を科白とする）という難詰は、会話の内容として唐突で不自然である。この（忘れ草を）忍ぶ草とやいふ」という奇妙な問いかけは、歌の「こは忍ぶなり」という回答が導き出されるためのしかけとして作られたものだと思う。しかし、地の文あるいは会話文の中で、その植物が物語の事実では忘れ草だと断定しているにも拘わらず、歌がその難詰に対抗して、これは誰がなんと言おうとしのぶ草だと強弁する、奇妙な言い争いの水掛け論である。歌の本文では、私の心は忘れ草生うる野辺とあなたに見られているようだが、忘れ草なのに「忍ぶ草」だと私が言い張る草を出してきたあなたの心を今後またのみにする、ということ、主体・客体の関係が錯綜して入れ替わってしまった。しかも、歌話の事実とは相応しない不自然な「見るらめど」という本文が求められてしまう。『伊勢物語』の当該歌は、地の文に対応することで、表現上も晦渋な歌となっているのである。

ところで、『大和物語』では、第三句「見るらめど」について、「なるらめど」とする本文が、天福本、勝命本にあり、為氏本は本文「なる」の「な」に「み」が傍記となっている。さらに、当該歌は『続古今集』二〇三番に入集しており、この詞書は『伊勢物語』に拠っているが、この本文も「なるらめど」である（『国歌大観』第一巻所収尊経閣文庫蔵伝為氏筆本）。複数の定家本系有力写本にも別本系にも、勅撰和歌集にもあるということで、「なるらめど」の本文はゆるがせにはできない。『伊勢物語』には第三句に特に異同があると報告されてはいないが、この（^{（注）}なるらめど）の本文によつて解釈すると、御息所の問いかけである「これはなんというものだったかしら」と

いう科白に対する回答として、「あなたは忘れ草生うる野辺になつてしまつて、私を忘れてしまつたようですね、でも、これは忍ぶ草なのです。だから今後もあなたの顧みを頼みといたしましょう」という歌が成立する。この、「なるらめど」の本文の方が、相手の思いが「忘れ」のようだが実はそうでなく「忍ぶ」もののだからこそ、相手のありようを「後またのまむ」とするという結句とのつながりは直接的になるのである。だから、「見るらめど」の本文の価値が高いとされているが、「なるらめど」が単なる誤記で素性の悪い本文であるとは言い切れない。『大和物語』には、本文が古態を残すと考えられるものが、『古今集』などでよく知られている表現に交代させられているとみられる例が他にも存在するが、この第三句の本文も、書写の段階で『伊勢物語』の本文の知識によつて改変させられている可能性もある。ともあれ、この一句の改変のいかに拘わらず、『大和物語』の応酬の方が内容的に平明で合理性のあるものである。

そして、諸注釈が『大和物語』の誤解とする結語、「おなじ草を、忍ぶ草、忘れ草と言へば、それよりなむよみたりける」の部分は、現実的にひとつの植物がふたつの呼称をもつかどうかとは別の次元で、この章段が、この応酬を、『伊勢物語』のような互いに強弁しあひ意地をはりあう応酬なのではなく、ふたつの呼称をもつ植物に寄せて、「私はこの草の名を忘れたが、これはなにか」と御息所が謎をかけ、「忘れたというならかえつて好都合、忍ぶ草ともいふのですから」とあうんの呼吸で了解し合う、そういう融和的な意味をもつものとして規定しようとした、ということである。

次に、第一六三段の本文を『古今集』『伊勢物語』と比較してみる。

『古今集』268

人のせんざいにきくにむすびつけてうゑけるうた

在原なりひらの朝臣

うゑしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへかれめや

『伊勢物語』(第五一段)

昔、おとこ、人の前裁に菊うへけるに、

植へし植へば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや

『大和物語』第一六三段

在中将にきさいの宮より菊召しければたてまつりけるついでに

うゑしうゑば秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへ枯れめや

と書いつけてたてまつりける

三者を較べると、少なくとも、歌は、『古今集』268番歌や『伊勢物語』と同じものである。しかし、地の文においては、『大和物語』には人物が特定されているという違いがある。『古今集』『伊勢物語』では誰のためとは判明せず、そのため抽象的な前裁誉めの歌となっている。一方、『大和物語』の傍線部では、二条后が菊を請ひ、その要請に応じて奉ったその機会をとらえて贈った歌だという地の文が、この歌をこの二人の関係内のもものと限定しているのである。

当該章段では、贈った菊は二人の関係の比喩であると読み取れる。

初句「うゑしうゑば」は、仮定法だが、関係を結んだことを強調しているのとらえることができる。そして、今後秋が来ないときは咲かないだろうが、そんなことはあり得ないから、ふたりの関係はまだ続くだろう、花が散るとおなじように、表立った関係を続けることはできなくとも、根が枯れることはあるまい、と訴えている。この場合、「枯れ」と「離れ」の掛詞の技巧が成立しているとは断言し難いが、同音で響いているかのように読み取りが方向づけられている。歌の主題としては、前段の第一六二段「後もたのまむ」と同想となる。

また、第一六一、第一六二段と、在中将と二条后物語を時期を追って語り継いできたのであるが、その配列の掉尾として、二人の関係を菊によそえているという物語の設定がある。慶賀の歌を私的關係の歌にすりかえる『大和物語』の方法は、第一六一段の「大原や」の歌でも、『古今集』861番歌を、地の文の改変によって私的な意味あいのもとと改変しているところにも看取できるものである。

二条后関連の四首三章段は、一連である。初発「思ひあらば」の歌が、后がまだただ人の時代の、懸想のはじめを示し、その「(衣の)袖」を「ひじきもの」にするという歌ではじまった関係が破れたあとで、「御衣」を賜ったことを通じて「思ひいづ」るものとなり、それに続いて「忘れ草」ならぬ「忍ぶ草」の比喩で、互いに忘れたようでも今後も通じ合う心を確認し、第一六三段ではついに後の位にまで上がって関係の断絶が決定的となつてしまつたはずの状況でも、「菊」のやりとりから二人の関係が確定的で永続的なものだと思を押す、という流れがある。『伊勢物語』とは人物を変更し、そこか

ら歌の意味もやりとりの性格も変えて、衣、または植物のような具体的な物象の贈答で連関をつくり、ゆるやかに推移しながら同想の主題をもつ一連の物語につくりかえたものといえる。

二、第一六五段、第一六六段の解釈と二つの章段の関連

『古今集』861

やまひしてよわくなりける時よめる　なりひらの朝臣

つひにゆくみちとはかねてききしかどきのふけふとはおもはざりしを

『伊勢物語』(第一二五段)

むかし、おとこ、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、

つゐにゆく道とはかねて聞きしかどきのふ今日とは思はざりしを

『大和物語』第一六五段

みづのおのみかどの御とき、左大弁のむすめ、弁の御息所といますかりけるを、みかど御やしおろし給うてのちに、ひとりいますかりけるを、在中将、しのびてかよひけり。中将、やまひいとおもくしてわづらひける、もとのめどももあり、これはいとしのびてあることなれば、え行きもとぶらひ給はず。しのびしのびになむとぶらひけること日々でありけり。さらに、とはぬ日なむありける。や

まひもいとおもりて、その日になりにけり。中將のもとより、

つれづれといとど心のわびしきに今日はとほすてくらしむと
や

とおこせたり。よわくななりになりとて、いといたく泣きさわぎて
かへりごとなどせむとするほどに、死にけりとききていといみじ
かりけり。死なむとすることいまいまとなりてよみたりける

つひにゆく道とはかねてきしかど昨日今日とは思はざりしを
とよみてなむたえはてにける

第一六五段は、在中將の死ぬ日を特定して形象するための物語である。第一首目に至るまでの地の文（傍線実線部）は、死ぬ日の前の日常を語るために「弁の御息所」なる人物を使つて、「しのびしのびになむとぶらひけること日々になりけり」と語っている。さらに、「さるに、とはぬ日なむありける。」と提起し、それが「やまひもいとおもりて、その日になりにけり」と、死ぬ日が特定され、第一首目が導き出されている。この歌の下句「今日とはすてくらしむとや」は、まさしくこの状況に即している。この第一首目までの物語は、日々に見舞いの手紙を寄越していた人が、ある日寄越さなかつた、という状況を創出したものである。そしてその日のうちに死が訪れた。その死に臨んで、在中將のあまりにも有名な辞世の歌「つひにゆく」が詠み出される。

この「昨日今日とは」の解釈については、現在の『古今集』『伊勢物語』『大和物語』のほとんど注釈書は、これを平易に、「今日明日」、すなわち近い将来のこと、というのを、音数を合わせたため特異な

言い回しだが「昨日今日」となったとしているようである。ただ、的確さを欠くもので、業平独特の表現だ、という。その一方で、「昨日は今日のことだとは思わなかつた」という解釈も『古今集』『伊勢物語』の古註釈で古い時代に行われていたようで、それが批判的に紹介されている。^{〔註〕}『大和物語』第一六五段にとつては、この排された解が有効である。前半部の語りと歌を伴つた以上、「つひにゆく」の辞世の歌は、『古今集』や『伊勢物語』所載の同歌とは意味をかえている。ずっと続いていった日常があり、それが途切れて特定の死ぬ日^{（死日）}がやって来たという本章段の流れの中で読み取るならば、これは、「毎日見舞いを受けていた昨日までは、死ぬのが今日のことだとは思つていなかった」という意味を展開しようとしているのである。この歌の背景を準備するために、第一首目の物語が必要だったのである。

『大和物語』は、「昨日今日とは」の、そうした耳馴れない不自然な言葉尻を捉えて、現在一般的にこの辞世の歌が解釈されるのとは別の、昨日と今日を切り離した意味を持たせるために、弁の御息所との交渉と前提の歌を用意したのである。

また、『大和物語』の地の文に、『伊勢物語』よりも『古今集』により共通する語構成が見られることにも注意が必要である（波線部）。「いまいまとなりて」という特徴的な語は、『古今集』の「番歌」つまり当該歌の次の歌の詞書にある。この歌は業平の息子滋春の辞世の歌であり、人物関係のつながりも考えられるが、『古今集』から本章段後半部が作られている可能性を示唆するものと思う。

さらに、在中將の辞世で物語が終わらず、第一六六段が続く。『大

和物語』は、死ぬ歌だから最終章、という在中将の一代記を綴る意図を持たなかったことがわかる。なぜ、第一六五段に第一六六段が続くのか、内容を詳しく検討したい。

『古今集』476, 477

右近のむまばのひをりの日、むかひにたてたりけるくるまのしたすだれより女のかほのほのかに見えければ、よむでつかはしける
在原業平朝臣

見ずもあらず見もせぬ人のこひしきあやなくけふやながめくらさむ

返し

よみ人しらず

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるべなりけれ

『伊勢物語』第九九段

むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひに立てたりける車に、女の下簾よりほのかに見えければ、中将なりけるおとこのよみてやりける

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮らさん

返し、

知る知らぬなにかあやなくわきていはん思ひのみこそしるべなりけれ

後は誰と知りにけり。

『大和物語』第一六六段

在中将、物見にいでて、女のよしある車のもとに立ちぬ。下簾のはざまよりこの女の顔いとよく見てけり。ものなどいいひかはしけり。これもかれも帰りてあしたによみてやりける

見ずもあらず見もせぬ人のこひしきはあやなく今日やながめくらさむ

とあれば、女返し

見も見ずも誰と知りてか恋ひらるるおぼつかなみの今日のながめや

とぞいへりける。

これらは物語にて世にあることどもなり。

（底本、返歌第四句「おほつかなさの」の「さ」に「み」と傍記。諸本により改む）

第一六六段の贈答は、懸歌のみ、『古今集』476番歌、『伊勢物語』

第九九段と一首目の和歌が共通し、返歌は異なっている。一方、『古今集』と『伊勢物語』の載せる物語と贈答には大きな違いはない。その二つの作品と『大和物語』当該章段との違いは、女の顔をはつきり見たかどうかまず一点である。『大和物語』では、「いとよく見てけり」と言い、「ものなどいいひかはしけり」として、「ほのかに見え」ただけ、とする前二者とは状況がまったく違ったものに設定されている。在中将の立つ位置も、女の顔の見える場所へと合理化されている。そうすると、「見ずもあらず見もせぬ」の意味するところが、前二者は「見なかったわけではないが、はつきりは見なかつ

た」というのであるのに対し、『大和物語』は、「顔を見なかったわけではないが、目近に会ったわけではない」という意味をつくりだしている。

さらに、「一点目の違いは、「これもかれも帰ってあしたによみてやりける」、即ち、翌日の贈答としている、という点である。前二者が、女がほの見えた「今日」の歌の贈答としているのと対比的で、『大和物語』においては、顔を見た「昨日」とながめくらす「今日」と、意味を変えているのである。ここに、前段である第一六五段との共通性、「昨日」に対する今日の物語」という性格がたちあらわれる。「今日」という語彙の連続ということが表象的には目につくのであるが、地の文冒頭部が簡略化され、「右近の馬場のひをりの日」という「今日」の特定を意図的に外し、昨日と今日の対応から発想されている物語である。ところで、『古今集』^{（上）}の番歌の詞書は（「前略」）物見にいであたりける女のもとに家をたづねてつかはせりける」とあり、波線部も含め、全体として当該章段の状況設定に近い。前段の「いまいととなりて」の句が選出されてきた方法と共通するものがある。

そして、翌朝に歌を贈るということになると、会ったわけではないのに、後朝めかして、「見る」の語が単に顔をほの見たとはい違う意味をなすことをここでも補強しているわけである。しかも、翌朝歌を贈ることから、在中将はこの女を、家の所在も含めて知っていた、と物語が設定していることが読み取れる。知っているのだから、「知る知らぬ」の返歌はこゝでは使えない。女の返歌は、「見たとか見ないとか不愉快なほめかしをするが、親しく会ったわけではない」という、後朝めかした歌い方への反発の主題で懸歌に対応

させている。『古今集』『伊勢物語』所収の贈答とは違った物語や人物関係を造型しようとしているのである。さらに、「誰と知りてか恋ひらるる」は、男は女を知っていた、という地の文を承けているのであるから、疑問の語を使っているも疑問の意ではなく、「私を誰だと知つてのうえで」という読み取りを導き出してくる。つまり、『伊勢物語』第九九段の結語「後は誰と知りにけり」とする物語を反転させて、最初から女が誰かを知っていた物語を構築しているのである。

「おぼつかない」の「み」は、文法的に有効に説明がつけにくいのであるが、懸歌、返歌とともにこれだけ多くの「見」がある以上、それとの関連で「み」とあると考えられる。地の文で、女の顔を「い」とよく見「たはずなのに、それを「おぼつかなく見」る、つまり、会うことはおぼつかない、と茶化される。「私を思つての物思いといつても、道理もないどころか、頼りのないものを見やるぼんやりした眺めだ」という拒否の返答が生きてくるのである。

この「見も見ずも」の歌の方が、「知る知らぬ」の歌よりも、懸歌との語彙の対応が十分に計画されており、ことは絡み合うことを企図しようとする『大和物語』の贈答にふさわしいとされる。^{（注11）}「知る知らぬ」の返歌では、「あやなく」物思う、という、自分への恋を一旦承認しながら、それでもなお思いを遂げる意思が足りないと訴えて相手を凌駕しようとしている。それに対し、「見も見ずも」の返歌では、「あやなき」「ながめ」という恋情を茶化し、それは「おぼつかないのがめ」だと切り返す、いかにも『大和物語』ごのみの滑稽化の方法をとっている。そして、第一六五段の第一首目「今日

はとはずてくらしてむとや」がことば上、第一六六段の懸歌の「今日やながめくらさむ」に共通するだけではなく、「つれづれ」とした心持ちが「あやなくながめ」る心持ちに共通している。第一六五段の一首目というのは、『大和物語』が初出だと考えられるのであるが、「つひにゆく」と「見ずもあらず」の二首の古今集歌がひとまとまりとなるための前提を作っているわけであり、この二首の語彙や内容を反映して作られた歌であるということができるかもしれない。

第一六六段末尾に、「これらは物語にて世にあることどもなり」とある。これは、直接的表現としては、第一六〇段からここまでの在中將関連の諸章段が、書かれた物語である『伊勢物語』によつてすでに巷間流布しているものであることを告げているかに見える。ところが、本稿でこれら諸章段を見てきたように、『伊勢物語』とはストーリーを変え、歌を変え、人物を変え、配列を変えており、一見同じ歌を提示しているようでも中身は換骨奪胎、ずらし、はぐらかしである。そうすると、この結語は、ことは通りに受け取るべきものではなく、これ自体、読者を惑わすトリックである。登場人物や詠まれた歌はよく知られたものだから、「物語にて世にあることども」という。しかし、真意は、「物語にて世にあることども」の、『大和物語』による改変を読み取れたか、読者を試すところにある。この「世にあることども」の部分が、御巫本、鈴鹿本で「よにあるよりほかのことども」、勝命本「よにあるほかのことども」となっている。これら諸本は、『大和物語』の伝える話の独自性を説明しようとしたものなのである。

『伊勢物語』は、あくまでも業平とおぼしき男の詠んだ歌が圧倒的

な力を持つていることが基本である。『伊勢物語』における対人関係は、対立的で孤立的である。相手よりも優位に立とうとし、ああいえばこいうの切り返しの応酬である。そして、一代記を志向するから、必然的に主人公が優先されてしまう。まれに主人公を貶すとしても、全体としては、歌を良しとし、その詠み手に共感を寄せさせる方向性に揺らぎはない。一方、『大和物語』は、『伊勢物語』の、章段の提示する眼前の物語の背景に、男の一生を仮構しようとする、そうした物語全体のつくりを拒否している。『伊勢物語』の二条后物語の中で特に男の哀切さで印象的な歌話をわざと含んでいないが、有名歌を取り入れる場合でも人物関係の中の歌に据え直そうとする。歌の詠まれる人物関係が親密なものとして示され、それらと歌が即応して興趣を増す方向に地の文あるいは歌の表現を改変し、ときに歌を付加し、連続する章段のなかの位置づけによつてさらに歌話の意味の差異化をはかっている。

歌の成立事情を第一次的に報告するものだと前提し、『伊勢物語』その他の作品と同じ目的で成立しているものだと、『大和物語』は、歌の独立性が低く、素性の悪い口承資料を、雑纂的に並べたとされるのが従来の評価である。しかし、『大和物語』は、集めてある物語が、『古今集』『伊勢物語』によつて、よく知られた古歌、歌話であることは十分に承知の上で、それらを別の物語に作り替え、語彙の反復と連続で配列した、加積的な制作物なのである。

三、偽作による虚構的人物造型

——第一五九、第一六〇段の問題

第一六〇段は、在中将と染殿内侍との贈答であるが、これに先だつて第一五九段に、すでに染殿内侍は登場している。この二章段は『伊勢物語』が伝えない歌五首の連続で構成されている（以下、本文全体の引用は紙幅の都合上省略する）。

第一六〇段の「大幣^{（一）}白い布」の贈答は、『古今集』706、707『伊勢物語』第四七段でよく知られている。「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどこそたのまざりけれ」大幣と名にこそたてれ流れてもつひによる瀬はありといふものを^{（注12）}の二首に基づいて創作されたものであるがすでに指摘されている。その指摘の通り、これらの先行歌の知識に基づかなければ、当該歌「大幣になりぬるひとのかなしきはよるせともなくしかぞなくなる」の意味を解すことができない。『古今集』『伊勢物語』の載せる歌が当該二首の本歌であることは疑いが無いのだが、これが、現実的に業平の有名歌を踏まえて交わされた贈答だったとは評価しにくく、業平に仮託した偽作なのであらうと考えられる。

この偽作という方法が、第一五九段の歌にも使われていると考えられる。第一五九段の和歌一首の詠み手は右大臣能有で、その和歌は「くもとりあやのいろをもおもほえず人をあひみて年のへぬれば」というものである。この一首は先行の和歌集にも物語にもみえず、『大和物語』初出である。内侍の「くもとり」のもののあやをや染

むべき（雲鳥の紋の綾を染めるのが妥当ですか、染めない方がいいのではないですか「私解」という問いかけに対し、「何色にすればいいのかわからない」という回答をする中で、内侍への恋情を訴えるものである。ところで、この能有の勅撰集採録歌は四首（勅撰作者部類^{（一）}による）、うち『続後拾遺集』885はこの「大和物語」掲出歌である。その他『古今集』に三首が載るが、うち二首は「うちつけにさびしくもあるかもみぢばはぬしなきやどは色なかりけり」（哀傷^{（二）}）「色なしと人や見らむ昔よりふかき心にそめてしものを」（雑上・883・詞書「大納言ふぢはらのくにつねの朝臣の宰相より中納言になりける時、そめぬうへのきぬあやをおくるとてよめる」）である。三首のうち二首に「いろなし」、の句があり、後者は染めぬ綾の色が主たる題材となつてゐる。そもそも、染殿内侍も、「染める女」という名付けによつて登場した人物であるという可能性が指摘され、固有性、実話性をもっているわけではないことが考えられるのだが、能有についてもまったく同様に、「いろなしの男」という類型的造型で染殿内侍と対になつたものではないか。端的には、本章段は、『古今集』885番歌を本歌とする偽作ともいふべき、強い影響下にあるということである。

第一五九段では、「染める女」の和歌はないが、一六〇段は女のほうから懸歌で「いろどる（＝染める）」をよみこんでゐる。この歌はほとんど『後撰集』83・84の贈答と本文を同じくする。『後撰集』でよみ人しらずの83番歌をここの作者染殿内侍としたのは、「いろどる」の語が染殿内侍を形象する絶好の語だったうえ、前後の章段との語の連関上たいへん都合のいい歌だったからである。ここでは、

内侍を支点に、人物が漸層的に交代しながら、「いろ」を詠み継いで在中将を登場させている。在中将が「大幣と名に立つ男」というよく知られた型によって登場しているのと同様、能有が「いろなしの男」として造型され、染殿内侍が「染める女」いろいろの女」として造型されているのである。

ところで、第一六〇段の内侍の歌の第五句「しかぞなくなる」の句は、「幣」の縁語としてならば「しかぞ流るる」でなければならぬのであるが、『大和物語』では、第一五七段から第一六一段までは断続的に「鹿（が鳴く）」が表象的にも隠題としてもひとつの題材として連続性をもって使われているという事情がある。

しかも、能有の『古今集』 ∞ 番歌と、『大和物語』第一六一段に載る「大原や」の『古今集』 ∞ 番歌が近接しており、第一六一段が『古今集』の詞書にはない「御衣」を賜ったことへの返礼としての歌、という地の文になっているのは、『古今集』が章段構成のヒントを与えた可能性を示すものかと思う。ちなみに、能有 ∞ 番歌のひとつ前、 ∞ 番歌は、第一六九段の遍昭作「みな人は」の歌なのである。

在中将章段でも、第六百六十一段の二首目、第六百六十三段、第六百六十五段の二首目、第六百六十六段の一首目と、『古今集』に載る在原業平の代表作を章段群中にまんべんなく配置して、有名歌でその人物を明確にする方法が一貫して使われている。その合間に「むぐら」「しのぶ」といった他の歌集に載らない特殊な歌と、そして有名歌の解釈を変えるための歌を配している。能有、染殿内侍、在中将と、色好みの有名人物たちについて、語られた事績を伝える、という目的ではなく、よく知られた歌を下敷きに、虚構的に歌を派生さ

せ、いかにもその人物らしさを類型的に象る、そうした方法をとっているものである。

四、語または音の連関、反復という章段配列の方法

一連の在中将章段は、なにか具体的な「もの」のやりとりを通じ、歌が特定の事物に関連するように話題を形成しようとしている。第一五九段は「御衣」「綾ども」を「つかはし」た、とする。同様に、第一六〇段「衣」を「しにおこせ」、第一六一「ひじき」を「おこせ」、「御衣」を「たまはる」、第一六二「わすれぐさ」を「たまへりけ」る、第一六三段「菊」を「たてまつ」る、第一六四段、「かざりちまき」を「おこせ」たる返事に「雉」を「やりける」、第一六五段、第一六六段の二章段を例外として第一六七段「衣」を「返しおこす」のに「雉、雁、鴨」を「加へておこす」とする。これらは、明らかに、もののやりとりと結びついた歌を連関させるという編集意図に基づいている。

その「もの」というのは、ひとつの流れは衣、または「大幣」「染めぬ綾」などの白い布である。第一五九、第一六〇、第一六一、第一六七の各章段がこの流れを作る。これに乗じるかたちで、「いろ」が第一五九、第一六〇段にみえる。さらに一つの流れは、「鹿」であり、これは第一五七、第一五八、第一六〇、第一六一と続く。加えて、「鳥」の類が第一五九、第一六四、第一六七にあらわれる。ついで植物が、第一六一「むぐら」、第一六二「わすれぐさ」、「しのぶぐさ」、第一六三「菊」、第一六四「あやめ」とあり、「むぐら」

「しのぶ」のような陋屋に生うる植物、あるいは軒を飾る「あやめ」と、類縁性の感じられる植物の連続がある。語彙の連関の網の目をはりめぐらすために素材が選ばれ、設けられた章段があるのだと考えるべきであろう。第一六〇段の「秋萩をいろどる」「秋の野をいろどる」の贈答歌は、『後撰集』では両首とも「秋萩」であるが、『大和物語』中の返歌の字句の変更に、第一六二段の「野辺」、第一六四段の「野」との連関をつくるためだった可能性があると思う。ときに植物であり、動物であり、衣であつたりする「もの」が、連関し、同じ種類でも漸層的に変化してずれていたりしながら関連づけられて、章段の連続をなしている。

また、前述の第一六二段「これはなにかいふ」という問いかけは、『伊勢物語』と当該章段の内容を画するキ・センテンスであるが、第一六〇段の返歌「流るともなにか見えむ」で「なにか」が予告的に提示されており、二つの章段の語彙上の対応関係が認められる。第一六六段の歌句「誰と知りてか」の疑問表現も同様に、『大和物語』が、『伊勢物語』の歌話を改変するときに使う共通するもので、回答が地の文に提示されており、疑問そのものというよりも、歌話の中で重要な事物への注意を喚起し、読者への念押しをするために繰り返して使われている方法である。

さらに、章段という単位で考えると、ものの名前、名詞に限るのではなく、感情語その他のことばが、同語として連続、反復する。それだけでなく、同音が連続し、反復する法則性も看取できるのである。

同音語の反復ということに関して例を挙げると、第一五四段に「あ

さまし」が二箇所使われており、それが第一五五段の歌「あさかやま」「あさくはひとを」の句を同音で導き出して、そのあとの地の文でも「いとあさましと思ひけり」と念を押している。第一六二段に「しのぶ草」が出てくるが、第一六五段冒頭部には、「しのびてかよひけり」「しのびてあることなれば」「しのびしのびに」(第二節本文引用部波線)と、「しのび」を繰り返している。第一六四段には「あやめ」があり、第一六六段は、おなじ五月五日の節句の日のできごとということが隠されたシチュエーションになっているが、ここに「あやなく」がある。今回考察対象とした在中将章段からは外れるが、その次に位置する第一六八段冒頭部分では、「おほむとき」「ときにてありけり」「ときどきあひける女」と続いて、「とき申す音」と、この冒頭部分の連歌を引き出している。また、在中将章段は「わびし」が散発的に連続していることが指摘されている。^(注17)地の文で第一六〇段、そして一見内容のつながりのない第一六四段、第一六五段の歌に連続して「わびしき」がある。ところで、第一六一一段には「ひじき」があり、「ひじき」で物名歌を作るならば、「恋ひしき」「わびしき」で作れるものを、「しきもの」の上に無意味な「ひ」をつけて物名にするという諸注釈の技巧の説明は説得力を持たないのであるが、その「ひじき」という特殊な語彙の反復に、「わびしき」が使われているものと見られる。第一六四段は非古今歌、第一六五段は出典不明歌で、語の連関の都合上選ばれたたり作られたりした歌であるとしても大過あるまい。このほか、第一六六段の歌には、「恋ひしき」がある。この歌句は、『古今集』『伊勢物語』では「恋ひしくは」とあるものが、『大和物語』では本文の大勢が「恋ひしきは」となっ

ているものである。これも、「ひじき」の反復のために、有名歌の本文を、文法的には逸脱するという無理があるにも拘わらず改変しているのではないかと思われる。こういう同語、同音の反復は、これまでは口承文芸であるゆえの表現の未整理の一例と処断されてのゆえか、看過されてきたが、これが意図的な表現方法なのだととらえるべきであろう。

数例を粗く指摘したにとどまるが、これらを見るに、章段間で語彙が連続し、反復する、あるいは表現に連関性があるということは一章段ごとに独立している歌話が口承的に伝わった後に書き留められたというのではなく、書く作業からこそ成し遂げられたことであろう。そして、「章段」という区分意識は認められるものの、一話ごとに完結したものとして読むのではなく、共通の語や音を持つ大きなまとまりや流れでとらえることが必要となるのではなからうか。

五、二人妻章段と在中将章段の連関

第一六七段は、人物の連続という観点からは、そのあとの章段群に属するといわれる。^{〔註19〕}しかし、語彙の連続性が『大和物語』の章段配列の流れをつくるうえで見逃すことのできない要点であることから考えれば、第一六七段は、第一六四段の「雉」「狩り」に呼び込まれて、連続を作るために設けられた章段であることは自明である。第一六四段は、在中将章段の中では、『伊勢物語』第五二段からの改変がほとんどなく、『大和物語』が改めてこの歌話を取り入れた意図

が独立では読み取りにくい章段である。しかし、第一六三段と、九月と五月の節句という点で対の関係をなしており、『伊勢物語』の同じ歌話である第五二段と第五一段がやはり隣接して一対となっている。また、前述のように歌中の語「わびしき」の連続というところで第一六五段の一首目にも関連づけられている。前後数章段を俯瞰すると、語の連関をつくるうえで引き出されてきた章段だといえる。第一六四段歌は、節句によせて、大切なあなたに贈り物を苦勞して調達した、という類型にあてはまる歌であり、雉は都では豪勢な贈り物であるが、第一六七段は「雉、雁、鴨」を「人の国に、いたづらに見えけるものどもなりけり」と、対比的に語って、そこに滑稽感をもたらしながら第一六四段をも茶化するための虚構である。

この第一六七段は、いわゆる二人妻の話型であるが、在中将章段群、それに先立つ能有章段の前に据えられているのが、第一五七段、第一五八段のふたつの二人妻章段である。第一五七段は、「馬」がかくしテーマであり、これが去られた妻の悲哀というよりは笑いの横溢した話であることはすでに指摘がある。^{〔註20〕}第一五八段は「鹿」がテーマであり、この「鹿」が、第一六〇段、および第一六一一段の「鹿尾菜（ひじき）」の語や鹿の社大原社の隠しことばにまでずっと連続している。^{〔註21〕}さらに、二つの章段とも、「うし（牛）」の語も共通している。ちなみに「うし」に関しては、第一六八段の良少将章段にも続いていく素材である。これら二人妻章段に続く第一六〇段は、「鳥」の語も有していて、第一六四、一六七段に連関をつくる。

在中将連章段群をはさむ三つの二人妻章段は、いわゆる二人妻の話型といいながら、動物のような、食肉とするいわば不風流の素

材を使い、しかしそれを巧みに、物名や掛詞の技巧を駆使し、歌に昇華して本妻に勝利を与える話として共通性がある。第一六七段は、本妻の元に男が帰るという歌徳説話の後日譚は付加されていないが、歌に章段の頂点があり、それを詠んだ本妻が緊張関係の中で優位を押さえるという図式は同じものである。歌徳説話では、歌の出来が突出していて、追いつめられた者が状況を逆転させてしまうところにカタルシスがあるが、『大和物語』は歌が結果であるから、状況が逆転したかどうかは重要ではない。この周辺では、有名歌の章段、有名人物の連続章段の合間を、二人妻の話型に笑いの主題を盛り込み、前後の章段と語彙の連続を設けて繋ぐ方法がとられている。つまり、在中将章段群と前後の二人妻章段は、人物や主題の連続性という観点では、断絶しているように見えるが、ことばの連関という法則性においては、前後とは無関係ではなく、それぞれが在中将章段にしっかりとくい込んでいる。そして、物名の技法、同語反復などで語を印象つけて語彙のつながりをつくり、本来悲しい話である二人妻の話型を、滑稽な話に転換する、そうしたずらしの方法が在中将章段と性格を同じくするものである。

六、『古今集』所載古歌章段と在中将章段の共通性

第一五四段「たつた山」、第一五五段「あさか山」、第一五六段「をばすて山」の三連作は、『古今集』に載る古歌によって構成された章段群である。真淵の『大和物語直解』では、三章段ともでの悪いつくり話だと断じている。

第一五五段「あさか山」の歌は、『古今集』仮名序で、「難波津」のうたとともに、歌学びの最初として紹介された一首である。『万葉集』巻十六「有由縁雑歌」²²⁶が当該歌とほぼ同様の本文を持ち、その左注に「右歌伝云、葛城王遣于陸奥国之時国司祗承緩怠異甚、於時王意不悦怒色顯面、雖設飲饌不肯宴樂、於是有前采女、風流娘子、左手捧觴右手捧水擊之王膝而詠此歌、尔乃王意解悅樂飲終日」（『新編国歌大観』第二巻）とある。これを承けて『古今集』仮名序には「あさか山のことは、うねめのたはぶれよりよみて」とある。この歌そのものが誰でも知る歌であり、そのみでなく、『古今集』の知識が相当程度普及しているという前提に立てば、仮名序の記す成立事情は広く共通の認識であつたはずで、これほど有名な歌に、『大和物語』が伝えるこれほど大仰で悲惨な話がついているとは、誰もが信じがたかつたのではないか。真淵が断ずる通り、当該章段は真实性の保証のある物語とは読み取りにくい。なお、『源氏物語』「若紫」巻に、源氏が若紫に詠み懸けた「あさか山あさくも人を思はぬになど山の井のかけはなるらむ」という歌があるが、この場では本歌がこの章段の伝えるような不吉な悲恋を背景としていることはまったく配慮されていない。そもそも、第一五五段の一段は、あさか山の地名と、山の井という情景と、悲恋の状況設定があれば、一首の背景を不足なく言い表すことができる。この章段は物語展開の都合上古歌を利用したというものではなく、古歌から物語を虚構してできたものという方向が考えられる。そして『万葉集』『古今集』が伝えるようなよく知られた歌話とは異なっているという意外性が、真淵の言うべき悪さだと思われるが、それがむしろ『大和物

語』の狙いではないかと考えるのである。

当該章段結語の「世のふるごとになむありける」と、わざわざ説明をつけるのは、実は「世のふるごと」ではないことの韜晦である。歌は確かに古い。だから成立した状況も古いはずだというには違いない。しかし、この時代に「世のふるごと」とされるべきは采女のエピソードである。これは字義通り受け取れるものではなく、この一文によつて逆に「世のふるごと」に仕立て上げるといふ『大和物語』の作為である。

第一五六段も同様である。『古今集』雑上、月の名歌群のなかにある「をばすて山」と、その所在地である信濃の国は更科郡という地名、そしてその地名を援用した、「叔母(または伯母)を捨てゝる物語」が構成されれば、歌の表現をすべて説明できる。「娼捨」と混同される「娼捨」、すなわち、棄老伝説というものがもし先行したとしても、『大和物語』はそれを類型として利用したに過ぎないのであり、伝説の記録を目的としたものではあるまい。「なぐさめがたしとは、これがよしになむありける」というわざとがましい結語も、第百五十五段の結語と同様、韜晦である。そしてふたつの韜晦は、在中将章段の末尾「これらは物語にて、世にあることもなり」という結語と同じ性格を持つものなのである。

第一五四段に関しては、地の文と和歌、懸歌と返歌の関係が未だ不明なのであるが、それらの関係に関しては、深い異和があり、全く状況にびつたりした歌とは言えないことは指摘できるかと思う。第一五四段と第一五五段の物語に共通するものが多いこと、両段ともに、所載歌が『古今集』等に載るよく知られた古歌であることを

以て、対の関係で連続していると考えたい。そしてこの異和感が、続く二章段を導入している。

第一五四段の懸歌、一五六、一五七段歌は、もともと一首が自立して流通していた歌である。第一五四段の懸歌、第一五六段歌は、『新撰和歌』にも載る、典範性の高い歌との認知がある歌である。そして、現在においては、これらの歌がことさら歌語りを伴っていたという証が、『大和物語』以前に見出せない。この三章段では、歌に先だつてまず詳細でリアリティのある道具立てとストーリーが展開される。読者の感情がひきつけられたところで、最後に、誰もが知っている古歌が突如提示される。ひるがえると、そのリアリティあるはずのストーリーは、その有名な歌の背景とするには誰もが意外に感じる話として一気に逆転する。歌が、聞き手の期待を裏切り、はぐらかす、「落ち」になっているのである。この点で、古歌を利用して物語の哀切さを増すように造型されたというよりも、古歌が精細な物語を裏切る、その落差を追及して作られた物語群ではないかと思われる。この、通常一首独立で伝えられているはずの古歌が、全く予想外の物語に結びつけられて存在する位置を規定されるという方法が、在中将章段での有名な歌の据え直しと共通するものである。

七、まとめ

『大和物語』在中将章段を読み直してみると、『伊勢物語』とは、人物、地の文の内容、歌の字句に変更を加え、配列を変えることによって、違う物語を構築し、章段間に連関を作り出している。『伊勢

物語』の表現する孤絶、悲哀や激情とは違い、人物の関係を親密にする融和的な物語を追求している。本稿が検証した章段群は、本来第一部よりは作り物語的だといわれているが、それを加味してもなお、一話一話独立の口承文芸を書き留めたのといえないような、虚構的、創作的で連関した内容、表現を持つものであることが明らかにになった。一連の在中将章段群は、『伊勢物語』を下敷きになっているが、周辺章段全体を通観するに、この章段群の重要な粉本は、『古今集』である。本稿で問題性を共有すると位置づけている第一五四段から第一六七段のなかで、『古今集』所載歌を一首でも含む章段は、第一五四、一五五（ただし「序」、一五六、一六一、一六三、一六五、一六六段で、それだけで半数を占める。歌数だけとって表象的に見ても、『古今集』の影響下にあることは間違いない。そのうえ、『伊勢物語』単独の典故、あるいは『大和物語』以外に典故を持たない歌だけが連続することはなく、『古今集』所載歌ではない歌は、ひじき、忘れ草としのぶ草、あやめと雉、あるいは二人妻章段の動物物名歌群など、ことさら特殊な素材の歌を選んで分散して配している。『古今集』の詞書と『大和物語』地の文の表現の類似、『古今集』内の位置と章段配列の影響関係も看取できる。『古今集』所載歌そのものを再録するのではない場合でも、所載の有名歌を典型に据え、その偽作ともいえるような類歌で、歌話および人物像をも虚構的に造型してしまう大胆な試みが見られる。有名古歌に地の文を創出したまったく別の様相の歌話としてつくりかえることも、誰もが知っている歌や物語の変奏という在中将章段と同様の製作意図に基づくものである。これら古歌章段は、在中将章段と同じ性格を持つ結語

を有している。

また、歌話や歌の主題や人物関係で章段が連関するということはさらに精細な読み取りによつて補強されてくると思われるが、そうした従来からいわれている連続性のみならず、語彙の連関、同語・同音の反復・連続は『大和物語』の章段構成の重要な方法であり、複雑な網の目のようにはりめぐらしてある。うまく同じ語を有する歌を使っているのであるが、語句の連関、連続性を維持するために歌句を改変したり地の文で調整したりして効果を得ている例もある。そうした連関をみるに、現在の章段の区分という枠づけだけではとらえきれない、大きなまとまりや流れが存在すると思われる。

『大和物語』の述作者が目指しているのは、歌や章段を読みかえるおもしろさであり、その意味で虚構的な物語構成なのである。そうでありながらも、『古今集』所載歌や『伊勢物語』所載の物語の換骨奪胎であるのだから、はじめから独創的であることを意図しているものではなく、すでによく知られている歌や物語を素材としてずらし、はぐらかし、異なる加積的な物語をつくる。だからよく知っているはずの歌が絶妙に改変されよみかえられて違った相貌でたちあらわれたりする。それらを配列するうえで、ことばを巧妙にえらび直し、差し替え、組み合わせ、いったん提示されたことばが巡り巡って何度も登場し、既視感をもたらしたりするという、パロディの集成なのである。

注

- (注1) 今井源衛『大和物語評釈』下 平成十二年二月。柳田忠則「大和物語における在原業平関係章段について」『解釈』昭和五十三年四月。猪平直人「大和物語」『在中将章段考——「在中将」像の再検討——』『文芸研究』151 平成十三年三月。
- (注2) 伊藤一男「『大和物語』の言語感覚」『実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ』平成十一年三月。中島和歌子「言葉の綴れ錦としての『大和物語』——九四段〜九六段を中心に——」『古代中世和歌文学の研究』二〇〇三年二月。
- (注3) 伊藤一男「笑いの『大和物語』」北海道教育大学語学文学会『語学文学』39 平成十三年三月
- (注4) 今井氏前掲書。猪平氏前掲論文。
- (注5) 拙稿「第一六一段注釈」『大和物語研究』第三号 平成十九年三月
- (注6) 今井氏前掲書【余説】でも、『伊勢物語』のこの会話の不自然さについて言及がある。今井氏の、『伊勢物語』の地の文と会話文の分け方、疑問か反語かの解釈の別の説明をもつてしても、忘れ草を忍ぶ草だと答える歌の合理的な解釈はなされていないと思う。
- (注7) 山田清市『伊勢物語の成立と伝本の研究』。ただし、林美朗『狩使本伊勢物語 復元と研究』所収「参考伊勢物語」所引
- 為家本に「しるらめど」の本文もあるようである。
- (注8) 柿本奨『大和物語注釈と研究』
- (注9) 拙稿「『大和物語』第九十九段の問題点——和歌第二句の本文と大井行幸の年次をめぐって——」『大和物語研究』第二号 平成十四年十月
- (注10) 北村季吟『大和物語抄』に「闕義云きのふまでけふとはおもはざりしといふ儀おほきにきたなし」とあり、『古今集』の古注にも、「両度聞書」「榮雅抄」に、この解を否定する条がある。
- (注11) 今井氏前掲書
- (注12) 注4に同じ
- (注13) 今井氏前掲書。柳田氏前掲論文。菊池靖彦『伊勢物語・大和物語論攷』二〇〇〇年九月
- (注14) 注5に同じ
- (注15) 菊池氏前掲書に一六〇段と一六一段の関連の指摘のみある。
- (注16) 注5に同じ
- (注17) 猪平氏前掲論文
- (注18) 注5に同じ
- (注19) 妹尾好信『平安朝歌物語の研究「大和物語篇」』二〇〇〇年十月
- (注20) 伊藤一男「鄙の雅——『大和物語』第百五十七段——」『旭川国文』第二十号 平成十八年三月
- (注21) 注5に同じ

(おの よしこ・北海道大学大学院修士課程修了)